

Transcreation (翻訳創造) としてのウェイリー訳
—原典と adaptation の間をみつめる—

緑川眞知子

早稲田大学文学学術院非常勤講師

資料

1. Domestication ドメスティケーション 自国化
2. [前略]おかしき額つきの透き影あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方おもひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。（「夕かほ」大成 101、わたくしに仮名を漢字にし、濁点・句読点を加えた。以下同。）
3. 「聞書奥よりのそく人は物などをふまえたる歟 [以下略]」
「はじとみの上よりのぞく女の床などをふまへずば、たけたかき事はあらじと思ひやるなり」（中野幸一編『岷江入楚』、武蔵野書院、1984年）
4. 『湖月抄』（有川武彦校訂『湖月抄』上、164ページ）
- 5.a. At first he thought they had merely peeped out as they passed; but he soon realized that if they were standing on the floor they must be giants. No, evidently they had taken the trouble to climb on to some table or bed; which was surely rather odd! (Waley Tuttle, p.54)
- 5.b. 食卓や寝台」（佐復秀樹訳、平凡社ライブラリー、2008）
「テーブルとベッド」（毬矢まりえ、森山恵姉妹訳、左右社、2017）
- 6.a. 朝餉のみ障子をあけて中宮もおはしませば、深うしろしめしたらむと思ふに大臣もいという（優）におほえ給て所所の判ども心もとなきおりおりに時時さしいらへ給けるほどあらまほし。（大成 570）

6.b. 朝餉の間の御障子を開けて、中宮もご覧になっていらっしゃいますので、絵に深いご造詣がおありであろうと思いますにつけて、大臣もまことに光栄な機会とお思いになって、所々の判定が心もとない折には、時々お言葉をおはさみになるご様子は理想的です。（中野幸一訳、『正訳源氏物語』第三冊、勉誠社、二〇一六、二八五ページ）

6.c. The sliding-screen of the breakfast-room was now pushed aside and Lady Fujitsubo entered. Remembering how learned she was in these matters Genji felt somewhat shy, and contented himself henceforward as exhibit after exhibit was produced with an occasional comment or suggestion, discreetly thrown in only when some point of especial difficulty threatened an indefinite delay. Waley, Tuttle, 1970, P.339

6.d.

佐復訳

朝食の間にふすまがその時引き明けられ、藤壺の宮が入ってきた。こうしたことに関して藤壺がどれほどの学識があるかを思い出して、源氏はいくぶん気恥ずかしく感じ、それ以降は次から次へと展示品が披露されるにさいして、何か特別に難しいことがあって延々と遅れが出そうな場合に、時折、控えめな発言をしたり示唆を与えたりするだけで満足することにした。（第2巻、P. 125）

姉妹訳

朝食の間の扉が開かれ、レディ・フジツボが現れました。絵画の審美眼に優れた方ですからゲンジもいささか気後れがして、彼女が来てからは、次から次へと絵が広げられても議論が長引きそうなきだけ、控えめにコメントや意見を差し挟むに留めます。（第2巻、P.135）

6.e. 末松謙澄訳： Meanwhile the Imperial-mother (The Princess Wisteria) also came into the saloon, pushing aside the sliding screen of the breakfast chamber. The criticism still continued , in which Genji made, now and then, suggestive remarks. （この時、帝の母上〔プリンセス・フジ〕も、朝餉の間の障子を開けてお部屋に入ってきた。勝負は続き、光源氏は時折示唆に富む意見を述べた。） Tuttle 版, 1974, p. 225